

チャレンジ・ザ・ドリーム

Challenge the Dream

～群馬の明日をひらく～

令和2年4月2日（第85回）放送

当協会は、平成25年度より、FM GUNMAと共同制作番組を毎月1回放送しています。創業・起業の応援をメインテーマとし、群馬発の企業のトップインタビューを中心に構成しています。

プロローグ

こんにちは。ご案内役の奈良のりえです。新年度が始まりました。夢への挑戦をテーマにお送りしているこの番組「チャレンジ・ザ・ドリーム」は今月で放送8年目に入りました。本年度も皆さんの元気につながる挑戦のストーリー、インタビューを放送していきますので、よろしくお願いします。新年度最初の放送を飾るのは、去年7月に群馬県知事に就任した山本一太知事と、前橋市出身でメガネ業界で躍進を続ける株式会社ジズホールディングスの田中仁社長のインタビューです。お二人をFM GUNMAのスタジオに迎えて、起業やイノベーションをテーマにお話を伺いました。

【プログラム】

■特別対談

群馬県 山本一太 知事

株式会社ジズホールディングス

田中仁 代表取締役CEO

◎アナウンサー 奈良のりえ

トップインタビュー

群馬県 山本一太 知事

株式会社ジズホールディングス

田中仁 代表取締役CEO

——群馬県の山本一太知事と株式会社ジズホールディングスの田中仁社長にFM GUNMAのスタジオにお越しいただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

山本知事：よろしくお願いします。

田中社長：よろしくお願いします。



【収録風景：FM GUNMAスタジオにて】

【お二人のプロフィール】

——もうご存じの方も多いと思いますが、初めにお二人のプロフィールをご紹介してまいります。山本知事は草津町出身の62歳。参議院議員を4期務め、内閣府特命担当大臣として科学技術政策や情報通信技術政策などを担当しました。県民の幸福度の向上などを掲げて、去年7月に群馬県知事に初当選。ワクワクする新しい群馬県づくりを目指します。

山本知事：無駄のない紹介をありがとうございます。

——よろしくお願いたします（笑）。次に田中社長です。田中社長は前橋市出身の57歳。24歳のときに服飾雑貨の製造卸で起業し、メガネ業界に進出し成功。起業家の支援も行って、起業家発掘プロジェクト「群馬イノベーションアワード」を上毛新聞社とともに開催しています。また、起業家のビジネススクールも開講しています。今日はそんなお二人に、起業や新しい技術、価値を生み出すイノベーションをテーマにお話を伺ってきます。あらためまして、どうぞよろしくお願いたします。

山本知事：よろしくお願します。

田中社長：よろしくお願します。

——まず初めに、田中社長に質問です。群馬イノベーションアワードは、このチャレンジ・ザ・ドリームと同じ年に始まり、去年で7回目の開催となりました。なぜこうした催しを始めたのですか。

田中社長：起業家がたくさん生まれている地域が、活性化していくということは、今後も変わらないと思います。そういう意味では、この群馬県から多くのイノベーターが生まれることによって、地域活性化の役に立つことができればと思い始めました。

——7回を終えてみての手応えはいかがですか。

田中社長：非常に手応えを感じています。それまではあまり注目されていなかった方が、アワードの会場でスポットライトが当たることによって、「こんな素晴らしい活動をしている人がいたのか」と、県民の皆さんに広く知られるようになるなど、起業家に対する一般の方の見方が変わってきたのではないかと感じています。

——山本知事もご覧いただいているようですけれども、ご覧になった感想はいかがですか。

山本知事：そうですね、何度か拝見させていただきました。毎年進化していて、参加者も年々増えていて、しかもそのプレゼンのレベルが上がっているという、なかなか素晴らしいイベントだと思います。何より、やはり田中仁さんの、何ていうんでしょうかね、群馬県をイノベーション拠点にしようという熱意……。

——熱意。

山本知事：その熱意に本当に感銘を受けました。やはりこのイベントは、仁さんの熱意で始まって、最初はそれほど大きな枠組みじゃなかったものが、いろいろな人を巻き込んでいくと。私は政治家なので、そこはすごく勉強になるのですが、やはり田中仁さんという起業家、この分野では非常に世界的に活躍している人が、覚悟を持って「ふるさとのまちづくり」を熱っぽくやっているわけですよ。この熱みみたいなものがみんなを巻き込んでいくのですね。なのですごくうれしいし、物事を起こしていくっていうのは、イノベーションがそうかもしれないけど、やはり個人の情熱、パッション、熱だっていうことを学ばせていただきました。

田中社長：知事にこんなにも褒めていただけてしまい、大変恐縮です。

——（笑）。熱くなってきますねえ。

山本知事：いやいや、私は、はっきり言って裏表ないので、思ったことしか言いません。本当にそう思っています。

田中社長：そう言っただけだと、本当にうれしいです。

——そうですね。でも熱量で言えば、知事も負けていないと（笑）。

田中社長：いやいや、負けていないどころではないです。

山本知事：いや、もう仁さんに負けないように、熱を放っていないといけませんね。

——放っていないとですね。それでは今日は熱っぽい放送でこの後もお届けできればと思います。知事は、ずいぶん前から田中社長のことをご存じなのですか。田中社長は、「ひとしさん」というお名前ですけど、「じんさ

ん、じんさん」とお呼びしていましたが。

田中社長：もう昔の話ですね。

山本知事：昔ですよええ。

田中社長：何年前でしょうか？

山本知事：何年ぐらい前かな。大臣になったころかな。なる前かもしれませんね。

田中社長：6～7年前でしょうか……。

山本知事：あ、6～7年だから……。私が内閣府特命担当大臣で、沖縄・北方対策や、コンテンツ、ITなど、11分野ぐらいのこと担当していたときに、IT担当大臣として3回シリコンバレーを訪問したことがあります。起業家の聖地ですね。今やずいぶんトレンドが変わっていますが、そのシリコンバレーに、日本人起業家の兄貴分みたいな人がいて、いろいろな話をする中で、「いやあ、群馬県出身でね、なかなか面白い起業家がいる」ということを聞きました。それで、「頑張ってるんで、一太さん、一回会ってみてくれないか」ということで紹介されたのが田中社長だったのです。現職の閣僚だったときに、おそらく初めて会ったのだと思いますね。

田中社長：はい、そうでした。話していて楽しいので、その後も継続してお会いしましたよね。

——やはりお二人が似ていらっしゃるのでしょうか、その熱っぽさもそうですし、イノベティブな考え方みたいなのが。

田中社長：山本知事は明るいじゃないですか。

——明るいですねえ。

田中社長：私個人の意見ですが、暗い社長の会社は、あまり業績が良くない印象です。やはりリーダーは明るくなければならないと思います。

【群馬県庁最上階のイノベーションエリア】

——さあ、そんなお二人のイノベーションについて、もう少し深掘りしていきたいと思います。まずは山本知事にお話を伺いましょう。起業家やイノベーションへの応援ということを山本知事も考えていらっしゃるし、県は本年度、県庁の32階にイノベーションエリアという

ものを設けるそうですね。これはどのような場所になるのですか。

山本知事：県庁の32階は、実はものすごいポテンシャルがあるのです。まず群馬県庁舎は、東京都庁舎を除くと全国の県庁の中で一番高い。その最上階にイノベーションスペースをつくる。ここをイノベーションのハブみたいにしていきたいと考えています。ここに、例えば、仁さんがやっているようなこと、起業家の塾もやっておられるのですけれども、能力のある人たちがどんどん育っているわけですよ。

——そうですね。

山本知事：こういう人たちが集まって語れる場所。これはセミナーだけではなくて、いろいろな意見交換もできるような場所ですね。こういうところから新しいビジネスが生まれて、新たな産業につながっていくような、そういうスペースにしていきたいのです。そして副知事に、経産省から宇留賀さんという、全国最年少の副知事です。素晴らしい人を招きました。彼はベンチャーとITの専門家ですから、ここを拠点にすることによって、もちろん仁さんを含めた、群馬県出身の優れた起業家、あるいは県内で頑張ろうと思っている人、あるいは県外の著名な起業家や、民間企業などを呼び込むことができると思います。非常に面白い居場所になると思いますし、前橋の新名所、にぎわいを創出する場所になると確信しています。

——運営というのは、どのように行っていくのですか。

山本知事：いろいろやり方を考えていきたいと思えます。民間企業と組む話などもありますし、NPOを含めたいろいろな人たちを巻き込んでいくという方法もあると思えます。そのやり方も、例えばスペースとして貸し出すこともできますし、自由に使ってもらうこともできますし、セミナーも、ビジネスマッチングもできます。とにかく新しいものを生み出せる空間にしていきたい。最新のスタジオも、あるいは編集機能もある空間でもあるわけなので、そこら辺をちょっとつなげて、田中仁の知恵も借りれば、結構面白い発信の拠点になっていくと思えます。

田中社長：プレッシャーですが、群馬県庁が、そういっ

たことを本気になってやるということ自体、とても素晴らしいと思います。

——そうですね。

田中社長：ほか自治体では、あまり例がないと思います。

——今まで全国を見てきて、そんなような感じがしますか。

田中社長：県庁にも市役所にも言えるのですが、行政は少し民間と距離があるのではないのでしょうか。この距離が、ちょうどいい距離であればよいのですが、それを超えて離れてしまっていては問題です。しかし、山本知事に代わって行政と民間の距離が縮まってくると、市民としても、県民としても楽しみな予感がします。

——こうしたらどうかという意見が、すぐ反映されるという、そのスピード感ですね。

田中社長：そうですね。

——一方で、スピード感がありすぎて、皆さんがついていけないということは無いのでしょうか、知事。

山本知事：山本県政になって6カ月が経ちましたが、政策決定のプロセスのスピードは、3倍ぐらいの早さになったと思います。なので、戸惑っている人もいますが、やる気のある人たちは喜んでます。私のFacebookのメッセージに、若手職員とか若手課長から、頻繁にメールが来ています。「面白い」、「今までは、やりすぎると浮いていたけど、全力でできるんですね」みたいなメッセージです。まあ全員がハッピーになることはなかなか大変ですが、はっきり申し上げると、絶対に雰囲気明るくなったと思います。みんな、よく笑うんですよ。それが大事ですよ。

田中社長：そのとおりです。会社も同様で、社員が輝いてない会社は、絶対に活性化しないと思っています。

山本知事：仁さんもそこは同じ考え方だと思いますが、仁さんがジーンズのCEOだというように、私は一応県庁のCEOじゃないですか。どうやってスタッフに働いてもらうか。スタッフが最大のリソースなのでよね。どうやってモチベーションを高めていくかというときに、いろいろなやり方があるのかもしれないけど、やはり緊張しないでやってもらうということが全てですよ。ま

ず、第一に知事のレクに来るときに、怒られるとか、厳しいことを言われると思っていて、緊張していたら、それだけで生産性が落ちますよね。なので、思ったことを言える状況をつくることと、あと、そんな簡単じゃないですけど、フラット。

——ああ、フラットな関係。

山本知事：それは何ていうか、課長と部長、知事と若手、そこにあまり壁がない。フラットな雰囲気っていうものをつくることによって、やはりみんなの緊張感がほぐれます。



【「tsulunos」オープニング配信の様子】

【世の中の活性化に不可欠な「イノベーション」】

——あらためて、ちょっと整理して伺っていきいたいと思うのは、イノベーションは必要なのか。また、起業するには、イノベティブでなければいけないのか。ちょっとお二人のお考えを聞きたいと思います。田中社長、いかがでしょうか。

田中社長：まずイノベーションが必要なのかという点については、世の中の進化と捉えればよいのではないのでしょうか。

——イノベーション＝世の中の進化。

田中社長：はい。様々なサービスや製品など生活において身近なものが、どんどん便利になって豊かになること

が、求められているのだと思います。

——そうですね。

田中社長：今まであったものをそのまま変わらず同じよ
うに行っていたら、飽きられてしまいます。そこで、そ
こに何か新しい付加価値を生み出したり、あるいは掛け
合わせていくということが、「イノベーション」という言
葉の意味ではないかなと思います。

——世の中は進化するのが当たり前、ということと言
うと、新しいを当たり前という……。

田中社長：まあ、そういうことですね。

——ジズさんのメッセージと似ている部分を感じら
れますけど、イノベーションって当たり前なのかもしれ
ないですね。

田中社長：それは人類の宿命なのではないでしょうか。

——宿命、なるほど。山本知事はいかがですか。

山本知事：仁さんのおっしゃるとおりだと思いますね。
そもそもビジネスは、イノベーションそのものでしょう。
人と違うことをやることによって、英語で「make a
splash」(あつと言わせる)って言うけど、違いがヒット
を生み出すのでしょうか。ビジネス自体がイノベーション
そのものだと思いますよね。イノベーションとは何かと
いうと、結構いろいろな捉え方があると思いますが、例
えば、ある主婦が石鹸を最後まで使うために、その石鹸
を包む袋に工夫を施した製品をつくった。これはもう立
派なイノベーションですよ。無駄なく最後まで石鹸が使
えるのですから。

——そうですね。

山本知事：なので、先ほど仁さんが言ったように、世
の中はやはり新しいことをやろうとする人がいないと全く
活性化しないですね。

——退化しちゃう。

山本知事：そうです。いろいろな考え方がありと思いま
すが、人生は限られているわけですから、自分の哲学は
何か一つ考えてみれば、そこは共通することがある
と思います。一つでも自分にしかできない、人にできな
いものを見つけて、それをやって、自分の好きな人を幸
せにすることですね。これがやはり人間にとってある

べき姿だと思います。それによって社会貢献できれば一
番いいですね。そこは仁さんと共通しているのですが、
群馬県知事は当然イノベティブじゃなきゃいけないで
すし、まず考えていることは、群馬県をよくするためには、
ほかの知事と同じことをやってもダメだと思います。十
人十色でそれぞれのオリジナリティがあるので、それを
活かした新しいアプローチをして、群馬県をよくする
ということが、人生の醍醐味ってものだと思いますね。

田中社長：そのイノベーションの文脈に合っているかわ
かりませんが、政治家と起業家は、世の中をよくするた
めに、活動や事業を通じて共感を得ることが必要な存在
だと考えると、本質的には同じなのではないでしょうか。

——言われてみれば一緒ですね。

田中社長：おそらく、知事は「県民を幸せにする」とい
う想いが、今取り組んでいる様々な活動につながってい
るのではないのでしょうか。

——そこが柱ですものね、県民の幸せが。

田中社長：はい。それは企業も全く同じです。やはり消
費者に対して何か役に立ちたいという想いで事業に取り
組み、その活動や製品が共感されなければ、会社は生き
残れないと思います。

——そうですね。

田中社長：同じですよ。

山本知事：全くそうだと思いますね。先ほど、仁さんの
熱にすごく刺激を受けたと言いましたが、イノベーショ
ンアワードや起業塾も含めて、これまで取り上げてきた
のは、やはり彼の個人的な想いですよ、熱ですよ。では、
政治家とは何かというと、特に知事とはどういう存在な
のか、とよく聞かれますが、あるべき姿は、一言で言う
と「伝道者」なのです。つまり、群馬県にとっていいと
思うことについて、「こういうふうには、皆さんやりましょ
う」と、県民を巻き込んでいく伝道者なのです。そこは
何が原動力かということ、パッションですね。例えば群馬
県は、平均寿命や健康寿命は全国的に見て大体真ん中く
らいなのですが、糖尿病悪化率は日本一なのです。そう
いう中で群馬県の人たちに、やはり健康を守るっていう
ことは大事ですよということを伝えるためには、筋トレ
やって、「62歳ですけど、体内年齢40歳ですよ」というよ

うに、自らが示さないといけないですね。

——ブログでその姿を公開していますよね（笑）。

山本知事：そうそう。筋力トレーニング本格始動前の肉体をね、披露しました。

——あらっ、それ、セミヌードということですか（笑）。

山本知事：ちびセミヌードみたいな感じです。大したことではないのですが。そこはね、先ほどの話に戻ると、本当に同じだと思えますよね。Gメッセ群馬を成功させようと思ったら、例えば群馬県の人たちにね、「じゃあGメッセを成功させるために、自分も何かに貢献しよう」って思ってもらわないといけないでしょう。それを促すことができるかどうかというの、実はね、リーダーとしての鍵だと思います。

——それを動かすのは、おそらく情熱なのでしょうね。

山本知事：そうだと思います。

——まだまだ情熱あふれるお話は続きます。それでは、ここで1曲お届けしたいと思います。まずは山本知事のリクエスト曲です。ミュージシャンの顔もお持ちの山本知事ですから……。

山本知事：はい、アマチュアミュージシャンですが。

——いえいえ、曲についてもいろいろなこだわりがあるのではと思いますが、今回選んでくださった曲はどのような曲でしょうか。

山本知事：Official髭男dismの『pretender』。極めてイノベティブな曲だと思います。

【クリエイティブが当たり前になる】

——さて、山本知事は、公約の中に群馬のクリエイティブ拠点化を盛り込んでいました。どのような想いでこの項目を入れたのですか。

山本知事：どんな組織でも、地域でも、国もそうかもしれませんが、クリエイティブな人＝挑戦者ですよ。やはり挑戦者のいないところは活気づかないですね。元気な挑戦者がどんどん出てくる県にしないといけないという想いを込めて、クリエイティブティのある人、情熱のある人、例えば、起業家もそうかもしれませんが、

そういう人たちが、魅力を感じて集まってくるような場所にしたいですね。彼らが、群馬県で起業をしたいとか、群馬に行けばこんな面白いことがあるとか、そういう発信ができる場所にしたいという想いを込めて、クリエイティブ拠点という言葉を使わせてもらったということです。

——田中社長、今のお話を聞いていかがですか。

田中社長：まさにそのとおりでと思います。クリエイティブティがなかったら、つまらないです。

——そうですねえ。やはり、常にクリエイティブでいないと……。

田中社長：クリエイティブティ＝個性の発揮ということでもありますよね。

山本知事：全くそうだと思います。

田中社長：私が群馬イノベーションアワードを始めたときの、想いについて触れると、学生はみんな画一的な教育を受けていますが、個人はそれぞれの個性を持っています。

——そうですね。

田中社長：それぞれに自分の好きなことがあり、自分の土俵があるはずですが、そこにチャレンジを許容する文化がないと感じ、私は自分なりに、これを起業という切り口で社会に訴えたいと思いました。もちろん全員が全員起業家を目指す必要はありません。運動が好きであれば、どんな運動でもいいですし、絵が得意な人、あるいは音楽が得意な人など、あらゆる自分の個性を活かせる、そういう街になってほしいというのが私の想いなのです。

山本知事：今の話ですが、イノベーションアワードもそうですし、仁さんが始めた起業塾もそうですが、こうした活動は、やはり前橋の若手が元気になりますよね。

——ああ、確かにそうですね。

山本知事：やはりこれだけグローバルな事業を展開して成功しているロールモデルがある。これが大事なのですよ。そういう意味で言うと、仁さんの活動というのは、本当に前橋の特に若い人をすごく元気にしていると思いますね。また、個性を活かすということはとっても大事

な話で、これも県庁にいろいろ持ち込んできていますが、やはり一人ひとりの個性や、活躍にスポットが当たる県庁にしたいですね。全く同じ発想ですよ。

——田中社長のジズは、ブルーライトカットメガネや、目の動きで集中力などを計測できるメガネ型デバイス、『JINS MEME（ジズ・ミーム）』など、それまでにない新しい製品を世に出し、また最近では、一人で深く考えるためのソロワーキングスペース『Think Lab（シンク ラボ）』の事業に取り組んでいらっしゃいますけれども、クリエイティブな存在だなというふうにあらためて感じます。田中社長ご自身は、クリエイティブな会社であろうと意識しているのですか。

田中社長：クリエイティブであることを殊更意識しているということはありませんが、やはり、ほかの会社にはできない、我が社ならではのものづくり、あるいは文化というものを大切にしたいと思いながら事業に取り組んでいます。

——でもメガネから、その空間づくりというのでしょうか、『Think Lab』まで、ちょっとかけ離れているというか……。

田中社長：当社をメガネ屋だと思われる方がほとんどだと思いますが、実は私はメガネ屋をやっている感覚はありません。メガネは、おそらくこれから何十年も経てば、必要ないものになってしまうと思っています。

——へええ。

田中社長：もしかすると目薬で視力が治ってしまう時代がくるかもしれません。そのときに、メガネがどういう存在になるのだろうと考えています。それが人々の生活をよりよくするようなものに変わることができれば、これから先もメガネは存在し続けるかもしれませんが、今の視力補正だけを目的としたメガネのままであれば、いづれなくなってしまうでしょう。例えば、奈良さんの40万年前の祖先は洋服を着ていましたか。

——着ていなかったですよ？

田中社長：着ていませんよね。しかし、人間は暑さや寒さをしのぐために服を着るようになり、今やそれがファッションになっていますね。

——そうですね。

田中社長：そういう意味では、今、この「目」が唯一、裸になっている臓器なのです。そう考えると、メガネが新しい機能的なデバイスや、スマホの代わりになるものになるかはわかりませんが、新しいもの変わった瞬間に、視力の良い、悪いに関係なく、皆さんがかけるものになるはずですよ。そうなったときは、メガネをかけてないと、恥ずかしくて街を歩けないという時代になるかもしれません。

——今、私たちが洋服を身に着けていることが普通であるように、メガネをかけないと、恥ずかしくて外に出られないということですね。

田中社長：はい、そうです。メガネを外すのは、家に帰ってご主人の前でだけということになるかもしれません。

——ああ、なるほど（笑）。

田中社長：この先どうなるかはわかりません。

——もしかしたら、そういうふうに変えるきっかけをつくっているのがジズだったりするのですか。

田中社長：同じようなことは世界のあらゆるテック企業が取り組んでいます。我々が限られた資本の中で何ができるかを考えた結果、やはりセンシング・アイウェアであろうということになり、『JINS MEME』につながりました。VRやARなどは、資本の大きな企業に取り組んでいたが、我々は自社ができることをやり、それがいづれ融合して、ジズが必要不可欠な存在であり続けるということになればよいと思っています。

——いやあ、話を聞いているだけでクリエイティブですね、山本知事。

山本知事：そうですね。仁さんの言ったことは、気鋭の経営者の共通認識だと思います。時代が変わっていくと、ライフスタイルも変わっていくでしょう。なので、そこに合わせて進化する、トータルソリューション企業みたいなものですよ。もともと、日本の戦後経済を引っ張ってきた自動車産業の代表でもあるトヨタや日産も、もう10年後は自動車産業って呼ばないだろうって言っていますよね。これはある意味、モビリティを確保するみたいな産業になるのであって、将来は自動車が走っているかどうかもわからないでしょう。おっしゃっていることはよくわかりますよね。

【多様性の中に新しいものが生まれる】

——さて、これからの時代、これがクリエイティブにつながるだろうという出来事や、キーワードがありましたら、ぜひ教えてください。

田中社長：地域が沈んでいて元気がないのは、多様性がないからだと考えます。地域社会が固定化してしまい、なかなか新しいものが生まれなくなってしまっています。以前からダイバーシティの重要性が指摘されていますが、多様な考えや、個人の個性といったものが混じり合った結果、イノベーションや、クリエイティビティが生まれてきます。多様性の代表とも言われるシリコンバレーでは、世界中の様々な国から人々が集まり、混じり合って新しいものが次々と生まれています。それを考えると、これからの地域に不可欠なのは、多様性、ダイバーシティでしょう。

——多様性、ダイバーシティというのがキーワード。

山本知事：私と仁さんとは、考えている方向性がすごく似ていますね。今、知事としてもう一つやっているのは、多文化共生社会をつくるということで、これもおそらく全国に先駆けて条例をつくらうと思っているのですが、やはり群馬県は、ものすごく寛容で、多様な価値観を受け入れるという発信をしなきゃいけないと思います。人の既存の認識を変えるっていうのは難しいですが、でもやはり優秀な外国の人も、群馬県で働きたいと思わせないとはいけませんし、群馬に来たら社会にも受け入れられる、自由になれると思う場所にしないと、実は人が集まらないのです。だからシリコンバレーはトランプ大統領に対していろいろ意見を言うのは当然のことなのです。やはりある意味でいうと、多様性を損なうようなことをされたら、シリコンバレーというか、アメリカのベンチャー自体が終わりですよ。

田中社長：そうですね。

——いやいや、興味深い話がまだまだ続きます。



【山本知事の記者会見の様子】

【イケてる群馬・イケてる前橋を目指す】

——では、少し話題を変えてみたいと思います。山本知事は、群馬のブランド力の強化を訴えています。また、田中社長は、起業の支援のほかにも、前橋中心街のまちづくりにもかかわっていて、以前お話をしたときに、「イケてる前橋、イケてる群馬になるといい」とおっしゃったのを私、記憶しております。そんなお二人に、群馬のブランド力やまちづくりについて、熱い想いをぶつけていただきたいと思います。山本知事、群馬のブランド力、ブランド化を考えたときに、何が強みだと思いますか。

山本知事：ありきたりの答え方をすると、東京から1時間以内で来れるこの場所に、これだけの大自然があって、東京よりも広い家に住める。しかも、おいしいものも食べられる。加えて、温泉もある。幸か不幸か、全国で一番か2番目に物価が安い。そういう意味では、バランスの良い住環境があるということなのですが、クリエイティブな人たちが「行ってみよう」と思う群馬県にすることが最大のテーマだと思います。ちょっとクリエイティブから離れて言うと、ブランド化っていうことの一つの大きな視点はですね、防災、減災、災害に強い群馬県。群馬県の人には、「群馬って災害が少ないからいいやなあ」と、なんとなく言うわけですよ。ですが、こういうエピソードベースとか、みんなが感じている、というだけではなくて、データサイエンスが大事なので調べてみたのですが、確かに災害が少ないのですよ。例えばね、震度1、2以上の地震の発生数ですと意外と多くて、全国で8番

目が9番目なのですが、震度4以上の地震の発生数ということになると、関東の中では圧倒的に少ないです。全国でも8番目ぐらいの少なさです。水害についても、過去20年を振り返ってみると、去年は残念ながら4人の方が亡くなられてしまいました。あらためてお悔やみを申し上げます。しかし、その前までは2人で全国でも最少レベルです。地盤もすごくいいと言われていまして、統計によると、全国3番目です。森林の面積が大きくて、水資源が豊富で水力発電も非常に可能性があり、日照時間が全国4番目で太陽光発電も可能性があります。

———そうですね。

山本知事：ということは、もし自立分散型のエネルギー構造をつくることができれば、停電にも強くなりますよね。群馬県はデータを見ても災害に強い。防災、減災、レジリエンスNo.1っていうブランドを確立できる。それが実は企業誘致とか、移住人口、関係人口の増加につながるというふうに思います。

———それから、会社のバックアップシステムというところでは、群馬は災害が少ないから注目されているのですよね。

田中社長：実は最近私も、現在都内に集中させている本社機能の一部を、前橋に移すことを検討し始めました。

———田中社長ご自身が。ジーンズホールディングスがですね。

田中社長：はい。首都圏直下型地震が今後30年間で70%の確率で起こると言われています。30年で70%ということは、70%の確率で明日起こることもあり得るということです。と考えると、本当に首都圏直下型地震が起きたときに、わが社はこのままでは大きな被害を被ってしまいます。また、台風の進路が従来と変わってきています。おそらく首都圏、千葉周辺を毎年のように直撃をするようになってくるのではないのでしょうか。そして、今回の新型コロナウイルスのように、新たな感染症が定期的に発生したときに、あの満員電車で会社に通うのは、従業員にも相当のストレスだと思います。

———そうですね。

田中社長：そういう意味では、群馬県はとてもよい場所だと思っています。

———今、公的な立場でお二方、お話しされましたけど、山本一太さんならではの群馬の強みっていうのが、もしあれば、教えてほしいなど。

山本知事：そうですね、Gメッセ群馬。これはトップセールスを全力でやります。でも、ここまで言うのと、また怒られますが、私が知事だったら、つくりませんでした。はい、申し訳ない。

田中社長：(笑)。

山本知事：それはなぜかと言えば、想定していたときよりもとてもライバルが多くなりましたし……。

———放送できるかな(笑)。

山本知事：あ、放送してください、大丈夫ですよ。競合するライバルも多いし、やはり高崎市との連携も足りなかったですね。なかなか成功させるのは難しいですよ。でも、もう完成しますから、できるからには全力でやります。セールスしますよ。「一太さんだったら300億円ぐらいあったら何したの?」って言われるので、私だったらですね、やはりロケ地をつくりましたね。本当にすごい、数百億かけたセットをつくります。

———太秦スタジオみたいなイメージ?

山本知事：まあ太秦みたいなイメージとは限らないですが、実は、群馬県はロケ地としてはものすごく注目されています。映画やドラマを群馬県内で結構撮っていますよ。

———あ、県庁昭和庁舎で撮ったりしていますよね。

山本知事：そうです。それで、東映のプロデューサーとご飯を食べたときに、「いや、群馬県にロケ地があればいいな」と言っていましたね。本当にすごいセットをつくれれば、日本の映画は元気になってきていますから、毎週みんな行きますよと。今ね、ロケ地誘致で、フィルムコミッションも含めて、盛り上がっているのは九州なのですが、条件は良いものの、東京からは遠い。だから「群馬で爆破シーンを撮れるところはありますか?」っていうから、「山ほどあるよ」と言いました。

田中社長：(笑)。

山本知事：今は、『西部警察』みたいなことはできないですが、爆破シーンもあり、本当に大きな本格的な、渋谷

のスクランブル交差点を再現できるようなセットがあったら、おそらくいろいろなところから来ますよ。アメリカのブロックバスター映画も含めて。そうやって来てもらえたら、そこに集まった俳優とか、そういう人たちも全部ね、群馬のPRに使えるでしょう。

——確かに。ハリウッドスタジオっていいことですか。

山本知事：そうです。その東映のプロデューサーが「時代劇のスタジオは結構ある」と。でも時代劇なんかわからないですよ。仁さんと私が見て、「この着物、違うな」とか、わからないでしょう。

田中社長：(笑)。

山本知事：今、一番足りないのはね、『三丁目の夕日』のような、昭和初期とかそこら辺の時代のスタジオなのですよ。実はNHKが持っていますが、当然NHKのドラマ優先で使います。こういうロケ地をちゃんとつくったら、たくさん来てくれますよ。ユニークな目線で言うのであればロケ誘致です。映画やドラマを撮る聖地にしたいですね。

——ドラマ、映画を撮る聖地ですか。

田中社長：確かに、そういうことだと思います。先ほど、『イケてる群馬、イケてる前橋』という話をしましたが、やはり今まで、群馬も前橋も、格好よくありませんでした。実は、前橋市の18歳から22歳の若い女性の流出率が中核都市の中で全国ナンバーワンで、その人たちが前橋から出ていく理由が「ダサい、汚い、怖い」ということらしいのです。

——そうですね。

田中社長：こういう状況を、変えなくてはなりません。今、私が前橋のまちづくりに取り組んでいるのは、もともと群馬イノベーションアワードは、群馬県全体の起業家支援のために始めましたが、まちづくりとなると、群馬県全体のまちづくりというのはできないので、まちづくりは前橋に絞ったのです。さらに、もう一つ理由があり、群馬県のイメージが低いのは、前橋の今の衰退した状況がかなり影響しているのです。

——前橋が要因になっているのではないかと。

田中社長：やはり、どこの国も、都市もそうですが、中

心が元気でなければなりません。

——県都が。

田中社長：前橋が衰退してしまっているのです、まずここをしっかりと立ち上げることによって、前橋はもちろん、群馬県全体のイメージも変わるのだと思います。やはり前橋が格好よくなないとダメですよ。

——今、前橋のホテルも、リノベーションを手がけていらっしゃるけれども、これはやはり、まちの魅力づくりの一つとしてやっておられるのですか。

田中社長：はい。このホテルも、ただ宿泊する場所として考えれば、採算性だけを考えて、ほんの1~2年で完成させることもできました。しかし、このホテルが、しっかりとした前橋のまちなかのコンテンツになり、海外からもここにやってくるようなデスティネーションにならなければならないと考え、しっかり時間をかけてやってきたのです。

——相当こだわりがある、ねえ。

田中社長：私は、そのホテルだけに限らず、まちづくりというのは、おそらく、50年、100年後のことを考えないといけないと思います。そういう意識で、一つひとつの事業に取り組んでいます。

——長い、こう、スパンで。5年、10年ということですね。

田中社長：ええ。そうですね。

——山本知事、今のお話を聞いていかがでしょう。

山本知事：仁さんが言うように、県都前橋がちょっと冴えないから、群馬県全体のイメージが芳しくないというのは、トゥ・ザ・ポイントだと思いますね。群馬県、格好いいかっていうと、あまりそういうイメージはないですよ。やはり長野は、なんだかんだ言っても、イメージ戦略がうまいですよ。おしゃれな店が多くて、「あ、長野、素敵、おしゃれ」。まあ確かに日本百名山の3分の1は長野ですし、美術館も一番多いみたいなのところもありますが、やはりイメージですよ。三浦瑠麗さんが、先日わざわざ来てくれて、その中で最後におっしゃったのが、これ、言っても怒らないと思うけど、「いや、一太さん、群馬県はね、やはりちょっと長野に比べるとね、あまり

おしゃれじゃない」と。オラオラ系のお店が多いとか言うじゃないですか。オラオラ系のB級グルメ。B級グルメもいいところがあり、B級グルメはグルメとして大切にしたいのですが、オラオラ系の店が多い。

——オラオラ系？

山本知事：「そうではなくて、女性がイニシアティブを取って決めるような店を増やしてほしい」と。で、「瑠麗さんは軽井沢に結構行っているから、軽井沢のイメージが強いのではないですか？」と、「松本にはそれほどおしゃれな店はないですよ」と言ったら、「いやいや、群馬よりおしゃれですよ」って言っていましたから、ちょっと研究したいと思います。前橋は、仁さんがいろいろ努力をしてくれてね、ちょっとおしゃれなアーケード街ができたり、例えば今度のホテル、すごく注目されているので、一つでもいいのですよ、「象徴的なこういう建物があるな」とか、「あ、こういうデザインがあって、デザインでやろうとしているんだな」とか、そういったイメージがやはり大事なので、まず前橋に格好よくなってもらう。そして高崎は結構元気ですからね。市長もなかなか辣腕の方ですし、前橋市長も頑張っていますよね。ですから、やはり前橋に元気になってもらうというのは、群馬県にとっても大事なのです。

——それでは、ここで1曲お届けしたいと思います。田中社長のリクエスト曲です。これはやはり今イケてるアーティストということでしょうか。

田中社長：やはり音楽も、「あ、時代とともに変わるんだな」ということを認識させられた曲です。曲はもちろん、米津さん自身にそう感じさせられました。自分たちの常識ではない音の動きをするのです。

——では、お届けしましょう。米津玄師で『Lemon』。



【GIA 2019 フィナーレ（上毛新聞社 提供）】

【事業成功のポイント】

——さあ、これが最後のパートとなりました。田中社長、事業で成功するためのポイントは何だと思えますか。

田中社長：成功するためのポイントというのはなかなか難しいですね。

——では、田中社長が大切にしていることはどんなことでしょうか。

田中社長：そうですね、自分の過去を振り返ったとき、大切にしてきたことが5つあります。

——はい。

田中社長：1つは、まず自分の好きなことを見つける。それは冒頭申しあげたとおり、自分の土俵を見つけることだと思います。2つ目が、誰もが皆、いろいろなことを頭の中で妄想するのですが、その中で実際に実行する人はごくわずかです。しかし、実行しなければ成功も失敗ありません。実行すること、行動力が大切です。3つ目は、日本人は「沈黙は金」などと言い、意外と無口な人が多いのですが、思ったことを口に出すことが大切です。夢を口にするのと、それが言霊として自分の無意識の中に入り込んでいって、自然と行動につながるのだと思います。4つ目は、困難から逃げない。自分の好きなことをやっていれば、困難から逃げることはないと思います。やらされていると、つらいときに逃げたくなることもあるでしょう。しかし私は、自分で事業を始めてからは、逃げなくなりました。5つ目が、やはり「感謝」という言葉に尽きます。人の人生というのは、自分で生きているようでいて、実は周りの人と織りなす物語なのではないかと思っています。今日のこの山本知事との対談もそうですが、いろいろな人と交わることで、人生がより面白くなるということがあります。私は、自分の人生の中でこの5つの言葉を大切にしてきました。

——知事も、うん、うんとうなずいていらっしゃると思いますけれども……。

山本知事：とても素晴らしい話で、60歳からでも起業家になれますよね。70歳からでもいいと思いますが、若い人たちに対するメッセージということで言えばね、人生に無駄なことは一つもないですよ。今考えてみたら、失敗だらけの人生でしたが、その分、引き出しも多いので

すよ。自分で言うのもなんですが。やはり、これまでずっと睡眠時間を削って漫画ばかり読んでいたことも、アニメばかり見ていたことも、スキーをやっていたことも、ロックバンドをやっていたことも、失恋も、いろいろうまくいったことも、全て無駄なことではないです。今、知事をやってみて思いますが、まあ20年以上国会議員もやりました、いろいろなことをやってきましたが、やはり全部自分の引き出しになるのです。「失敗を恐れるな」と言うものすごく陳腐ですけど、どんな失敗も、絶対にその人の個性を磨き、魅力的になるための材料になるので。ですから起業もそうですが、何かに挑戦する若い人たちにはそれを言いたいですね。無駄なことは何一つありません。

【リーダーシップとは】

——事業を進めるには、中心となる人物のリーダーシップってすごく必要なというふうな、今日お二方にお会いしてあらためて思いました。お二人は、リーダーシップについてどのようにお考えなのか、そのあたりを、まずは山本知事から伺ってもいいですか。

山本知事：そうですね。いろいろなタイプのリーダーがいると思います。おそらく、その時代の状況によって、あるいはその国民性によって、求められるリーダー像というのは変わるので、これがいいリーダーだという模範みたいなものはないと思いますね。ただ一つ言えるとする、やはりリーダーは、支えてくれる人がいないとできないですよ。支えてくれる人をいかにクリエイティブにするか、ということが勝負だと思いますよね。これは私のスタイルなのですが、押しえつけないで、できるだけ自由にやらせてもらうことだと思います。そこだと思いますね。私の場合は、自分が縛られるのが嫌いなので、人間が一番クリエイティビティを発揮するとき、縛られないで自由にやっているとだと思いますよ。それから面白いと思っているとき。そういうときに人間は生産性とクリエイティビティが上がるのだと思います。その状況をつくることは、実はリーダーにとっては大事なんじゃないでしょうか。そのやり方は、ケース・バイ・ケースだと思います。

——はい、田中社長はいかがでしょうか。

田中社長：いろいろな捉え方があると思います。ある人は、リーダーというのは、お山の上に登って、みんなを「よっしゃ、よっしゃ」と言ってまとめる人だと言う人もいます。一方で、「リーダーはリードする人だ」と言う人もいます。要は桃太郎は世の中をよくするために「鬼退治に行くぞ」と言って、キジやサルなどの、そのビジョンに共感した仲間を連れて、自ら鬼ヶ島に行きますが、それがリーダーだと言う人もいるのです。どちらがよいとは一概に言えませんが、少なくとも私は、リードする、つまり自分がプレーヤーとしてどんどん動いて見せるという方に近いと思います。やはり自分自身が行動しないと説得力がないと思うのです。

——まずは自分がやってみせる。

田中社長：そうですね。「よっしゃ、よっしゃ」という感じで、「これやっておいて」というのは自分の性格に合いません。そういう人は起業家に向いていないのではないかと思います。

山本知事：なるほど。先ほど仁さんがいいことをおっしゃると思ったのですが、実は、世の中はそんなに早く変わらないと思います。例えば、まちづくりもそうですし、群馬県を面白くしていくための挑戦は、20年も30年もかかるのですよ。ですが、「なにが面白いことが起こるかも」という、空気感を変えることが大事なのですよ。これがないと、誰もワクワクしないですから。ここだと思いますね。ですが、本当に変わるためには、やはりある程度時間がかかると思います。

田中社長：山本知事がこの群馬県を変えようとしたときは、知事はやはり桃太郎型だと思いました。

——ああ、そうですね。

田中社長：ですから、私と近いのだと思います。

——そうですね、お二人、似てらっしゃいますものねえ。そんな元気いっぱい情熱あふれるお二人ですけれども、私の素朴な質問として、落ち込むなんていうことはあるのですか。

田中社長：いえ、落ち込むという言葉が適切かわかりませんが、反省することはよくあります。

——あ、落ち込むではなく、反省。

田中社長：はい、そうです。

——元気がないとか、そういうときに、どうやって自分をまた奮い立たせていくのかなと。いつも元気に見えるけど、そうでないときもあるのかな……。

田中社長：それは知事に聞いてみましょう。

——聞きましょう。

山本知事：いや、落ち込むという表現をどう取るかですが、それは人間なので、やはり感情の抑揚というのはありますし、うまくいかなくてがっかりすることだってありますよね。ですが、基本的に、物事は楽天的に、前向きに捉えたほうがいいに決まっているじゃないですか。ここに生きられる時間が限られているのですから、できるだけ面白く、楽しく毎日を過ごしたほうがいいと思いますよね。私の場合、よかったのは、基本的に楽しいことがあると、免疫力が上がるのですよ。仁さんと話しているだけで免疫力が上がるのですよ。政治家なので、ニコニコしているんですけど、闘っているわけですよ。政敵もいるし、既得権益とも闘わなきゃいけないのです。

田中社長：(笑)。

山本知事：そうやって、怒ると、これも免疫力が上がるのですよ、また。

——怒ると？

山本知事：そうです。なので、何くそじゃないですけど、「必ずやっつけてやる」とか思うとね、戦闘力が高まるのですよ。楽しいとき、怒ったときのどちらの場合でも免疫力が上がるということだけはよかったですね。

田中社長：(笑)。すごいです。

山本知事：怒っているときも免疫力は上がっていますから。

——すごいですねえ。

山本知事：ええ、これはいい構造だなと思っています。



【JINS イオンモール水戸内原店】

【起業や新規事業に取り組む方へのメッセージ】

——最後の質問となりました。お二人から、起業や新しい事業への挑戦などを志す人へのエールをいただきたいと思います。山本知事、お願いいたします。

山本知事：政治も、きっとビジネスもそうだと思いますが、全人格をかけた勝負だと思います。自分が今まで人生でやってきた成功、失敗、横道にそれたなというような、いろいろな経験も、実は全部自分の人格の一部ですから。やはり素のままに生きて、全人格で勝負するという形で、ぜひ頑張っていたきたいと思います。

——ありがとうございます。では、田中社長、お願いします。

田中社長：知事のおっしゃることは、本当に自分と似ていると思います。実は先日、ある高校で色紙を書きました。「本気は自分への投資」という言葉です。

——本気は自分への投資。

田中社長：何事も本気にならないと面白くありません。うまくいっても、失敗しても、学びがないのです。だから本気になろうということなのです。仕事でも、まちづくりでも、本気になろうと。おそらく周囲からは馬鹿だと思われると思います。しかし、馬鹿だと思われていても本気になってやっていると、その中に面白さが見いだせると思っています。

——全人格をかける。本気は自分への投資。

山本知事：本当に難しいから、達成感があるのですよね。

田中社長：そうですね。

山本知事：誰でもできることをやっても、面白くも何ともないですね。

田中社長：はい、その通りだと思います。

——お二人がタッグを組んだ群馬って、これからますますワクワク楽しくなるのかなというふうに、今日、お話を聞いていて感じました。今日は群馬県の山本一太知事と株式会社ジンズホールディングスの田中仁社長にお話を聞きました。お二人のますますのご活躍を期待しております。本日はありがとうございました。

山本知事：ありがとうございました。

田中社長：ありがとうございました。

エピローグ

夢への挑戦をテーマに、明日へ向かって走っている人を応援する番組「チャレンジ・ザ・ドリーム」。新年度1回目の放送の今日は、去年7月に群馬県知事に就任した山本一太知事と、株式会社ジンズホールディングスの田中仁社長にお話を伺いました。お二人の熱量に感化されて、元気が出てくる思いがしました。

ここで群馬県信用保証協会からのお知らせです。群馬県信用保証協会では、新型コロナウイルス感染症の影響により厳しい経営環境にある中小企業・小規模事業者の皆さまへの資金繰り支援と経営相談を実施しています。資金繰り支援の主な保証制度として、危機関連保証をご紹介します。危機関連保証は、大規模な経済危機や大災害が発生した場合に利用できる保証制度です。保証限度額は、通常の保証とは別枠で2億8,000万円までご利用いただけます。今回の新型コロナウイルスの感染拡大や各種行事の自粛によって経営に影響を受けて事業資金を必要としている中小企業の皆さん、保証協会の危機関連保証のご利用を検討してみたいかと思いますが、また、新型コロナウイルスに関する経営相談窓口を設置して、中小企業・小規模事業者の皆さまの相談を受け付けています。なお、最新の情報については、群馬県信用保証協会のホームページをご覧ください。群馬県信用保証協会からのお知らせでした。

「チャレンジ・ザ・ドリーム～群馬の明日をひらく～」の番組は「頑張るあなたを応援します！群馬県信用保証協会」の提供でお送りしました。ご案内役は、私、奈良のりえでした。

FM GUNMAと当協会の共同制作番組

チャレンジ・ザ・ドリーム
～群馬の明日をひらく～

【6月の放送のお知らせ】

令和2年6月4日（木）12:00～12:55

再放送 6月6日（土）8:00～ 8:55

ぜひお聞きください！